

幽庭に

幽庭にいとど散りたる紅塵を踏んで去り行く春風か君は

深海鮫鯨

春の日の庭を斜めに切る影は鴉にあらむ羽音がきしむ

たまこ

からたちの花ふれかてに咲く春の夕へうばらの君ならなくに

ぎを

夕焼空雀子たかたか歩きおり密談なるか三羽寄り添ひ

海月

古き日の三羽烏のドキュメントそろそろ始む身辺整理

文枝

身のめぐり整理いくたび思ひしか整はぬま富士の白雪

れん

思い出の整理をしつつ削ぎゆけばついには笑う髑髏となりぬ

深海鮫鯨

銀河のやうに煙つてゐたと誰か言ひみんなの気持になじむ結論

たまこ

わたくしを揺さぶる展開ほしくなる新玉葱をシャリリと噛めば

雛菊

幾度のほぞを噛みつつ生きつぎぬ魂のそこより希ふやすらぎ

れん

一日の疲れ湯船に身を任せ小さき者の唄にやすらぐ

文枝

窓の外子どもの声に目を覚まし春つららかな日曜の午後

調

背に余る色とりどりのランドセル集きて散りて駆けて転げて

蘇生

ランドセルに鉛筆カタカタ鳴らしつつ吾は駆けにき我が子も駆ける

たまこ

赤色に蝶の描かれたランドセルわれの記憶の目にぞ甦りぬ

れん

ランドセル駆ければ音する筆箱とノートの踊る板橋の上

弁慶

天仰ぎふたりで渡りし板橋は今ただひとり揺れて渡りつ

小調

春の獅子駆け去ることく雨晴れて一人ゆく君いやしけ吉事

ぎを

轟々と春の嵐が吹き荒れて愁いひととき霧に散りたり

蘇生

春風になびく櫛の新葉の先は薄紅はじらふやうに

雛菊

うさもろと散りゆく花の春の風つかれたる身にあおぞら深し

れん

白薔薇の花びら端よりまたなえて反りゆく雨の春日に思ふも

ぎを

春霖の相合い傘は軽やかにあなたの顔が右肩の上

小調

春の霧晴れ行く山を眺むれば色とりどりの木々の若葉よ

弁慶

子規鳴いて俳句の森の鶯の鳴かざる夏は緑一色

深海鮫鯨

風を聞く太古の耳はたちまちに哭く蜀魂その声を知る

真奈

春風を聴く聞く為の耳として棕の老樹が茸を生やせり

たまこ

道辺の棕の梢の音清さが春風ぞふく小夜の中山

弁慶

夜明け前闇のしじまが揺れ動く出庫注意のブザーの音かな

小調

少年期明るき目して自転車の菜の花畑駆け抜けにけり

真奈

三十路にて戦時迎えし母が今航路の果てに生死さまよう

蘇生

時の間の花も思ひもうち散らし春の嵐は過ぎ去りにけり

ぎを

みのめぐり過ぎゆきのこと思ひなし静寂なれるありどにぎづく

れん

夕立受け山に今年もミモザが咲き満ちて別れしはほんの昨日のやうな

たまこ

立しまま目薬差さばおのづからイナバウアーとなるにけるかも

弁慶

ひなげしの花は華やか茎細く長くまつすぐモデルの姿

小調

すみれ咲く門を過ぎれば犬がいて花盗むかとわれに吠えたり

深海鮫鯨

静けさもたやすく破れ門を出づ行方もしらぬ途は傾斜へ

れん

自転車で坂を下れば思い出す友と走った制服の暮れ

小調

沈みゆく陽へくだりゆく坂の風時は追い越す人と人影

深海鮫鯨

古もかくや愛しき人思へば多摩川崖に青嵐立つ

ぎを

おもふさま辛き四年を臥していま遺影にいとし母の福耳

蘇生

ひたすらに越えこし辛さなにならむ生命ある身の掟にあるや

れん

ぎっくりと詩魔わが腰を打ちにけり砕けて沈む黄金週間

深海鮫鯨

ふるさとの桜はついに目を開けず沈む心に岩木山笑ふ

雛菊

竹の子に独活にタラの芽路に芹里山満載弟が来た

寂

津軽野に櫻咲く日の近からむ岩木の山の微笑むがごと

弁慶

岩木山笑ふ裾野に生受けて友は笑みつつ逝きて五年目

文枝

幼きに手をかざしたるふた瘤の有珠山は無く母も逝きたり

蘇生

タラの芽を水挿し陽に当て少しでも太らせやうと伯母のもてなし

雛菊

陽だまりの中を駈けてく子どもたち君とわれとの子を思いつつ

詠人知らず

もう若くはないと思ひつ恩寵の錯誤なるかな麗はしるとき

真奈

陽だまりの中を駈けてく子どもたち君とわれとの子を思いつつ

小調

還暦にさらに干支など重ねても日々に思つは老いはひとごと

蘇生

思ひつつ日長くなりぬ早緑の若葉もむなしくはや夏立ちぬ

ぎを

悲しみの淵むなしくもたちもどる長らふことのせつなさにあり

れん

現世の悲しみ壺に封じ込め背に太陽画架に向かひぬ

文枝

あかねさす長き廊下ですれ違ふ走るつむじは球児に似たり

小調

あかねさす高き木々の枝の先山藤薄き紫のふさ

弁慶

緑なす谷やに色なす山藤の高みにゆれて夏は来にけり

蘇生

はやも夏さびしく偲ふ人ゆゑに卯の花くたし音も花もなく

ぎを

講義する机の紙片をひるがえすあわてふためき夏は来にけり

くりおね

繚乱の花も冷雨に翳さしぬ母も逝きたり夏は来ぬかや

蘇生

共に行きし最後は初夏の霧ヶ峰 蓮華躑躅に朱に染まりいき

たまこ

夏の雨この世の仕事成し遂げて母は逝きたり行きつ戻りつ

くりおね

夏薊うすくれないの花のなか小さき雨の雫残り

弁慶

繁りては紛れるほどの梅の葉の緑の雨にそば濡れてをり

蘇生

はつ夏のあまい旋律言の葉のひかりとかげにたわむれてをり

くりおね

はつ夏の風にゆらめく乙女らの緑の髪かみの美しきかな

弁慶

干潮の浜に満ちたる磯の香のいつとは無しに夏は来にけり

蘇生

夏の朝山川草木皆悉佛と称えて僧は峠越え行く

弁慶

ま幸くと願ふに万花をくたす雨ふれる今朝より手術つづくも

ぎを

きりさめに隠れてまたもあらはるる薄むらさきの桐の花なり

れん

「恋」は「孤悲」だよってひっそりと桐の雨降るむらさきの花

真奈

五月雨の峠を一人越えて行けば薄紫の桐の花みゆ

弁慶

母を護り寡婦を通しし祖母なりき谷間の空に高く咲く桐

たまこ

たかだかと聳えて咲くはむらさきの桐のはななり彷徨ひしころ

れん

奥山の真木の密林黒々と中に紫桐の花かな

弁慶

闇深き原生林を背にし夢中山幻住寺とぞ誰がつけし名か

たまこ

外にも出で胸をもひらき薫風の五月を行かんか誰が恋となく

ぎを

額ほどの庭を彷徨つまだら猫追えどもゆるり五月の風に

蘇生

ふるさとの宿のガラスに額をつけ夜の街灯り眼をとづる

れん

閉づる眼のなきなめくじにへのへのと目鼻を書きて過ぐる人の世

深海鮫鯨

みどりなす五月の風にふかれつつ面影橋を渡る君かな

弁慶

雷の夜しづかに秒針い巡れり今頃いづくに君いますらん

ぎを

遠雷の途絶えし後の山脈の上なる雲の夕焼けの色

弁慶

頬染めて雲乗る人の帰りゆく巫山の空に朝は明けゆく

深海鮫鯨

ブランコに忘れし『のんちゃん雲に乗る』小学校の跡も今なく

たまこ

廃村の真中に広き空き地あり村立尋常小学校跡

弁慶

人ら去り草木深き山河あり時に感じて鳴きをる鳥ら

深海鮫鯨

我町に郭公啼いて夏が来た尾っぽふりふり屋根であいさつ

雛菊

老鷺の谷また谷の囀りにシヨットに立ちて暫し愛でをり

蘇生

甘き香に誘われ森に分入ればおがたまていふ花の咲きしよ

寂

おがたまの薄紫の花の香や慰められてさらに哀しく

たまこ

なんの木とかつて問いたるおがたまの花が社に香る初夏

蘇生

我が魂もあくがれ出でな招霊の花薫りたつ五月の闇に

ぎを

五月闇物ともせずには峠道越ゆれば海に昇る朝日よ

弁慶

招霊のいにしえよりのひびきあり甘き香りのひともの帯

くりおね

落ちゆける後醍醐天皇の手触れしと伝はる桜の今年の若葉

たまこ

実朝を偲ぶ縁の大公孫樹老い曝ひて青葉悲しき

蘇生

桃李和歌連作百首歌集

第七三〇一首より七四〇〇首迄

平成一八年四月一四日より平成一八年六月一日迄